

公益財団法人 大阪科学振興協会

平成26年度事業報告及び決算の承認について

当協会は平成24年度、公益財団法人として新たな歩みを開始した。平成26年度はその3年目であると共に、大阪市立科学館の指定管理者として指名を受けた9年目の年である。

26年度の入場者数は709,818人で、史上第5位、21年度から6年連続で70万人を超えた。観覧料収入は約1億8,894万円で、予算を約3%上回った。内訳は表1、表2に示すとおりで、展示場入場者数が史上第6位、プラネタリウムは史上第12位であった。

この良好な実績は経営計画で重点を置いた「日々の職員等の基礎活動」が実を結びつつある証だと言える。たとえば、「はやぶさ2」「THE 結晶展」「江戸時代の天文学」「はやぶさ帰還とイトカワの石」など魅力的な企画展の実施、新展示「メントール結晶」の導入、「はやぶさ2に見る理学と工学」など「スペシャルナイト」の開催、市内小学校への「出張サイエンスショー」など精力的に各種事業を実施した。

また、6～8月のプラネタリウム番組「天の川って、なんだろう」は、天の川の正体を、生解説にあわせてダイナミックな映像で紹介し、座席占有率が約62%のヒットとなった。これは学芸員が独自に制作したソフトの内容が評判となったものである。さらに、サイエンスショー及びエキストラ実験ショーにおいては、学芸員が企画・実演するだけでなく、学芸員指導による市民参加を拡大することで、館内外での実施回数を増やすとともに、市民による企画が実現するなどレベルも向上し、好評を得た。一方、JR大阪駅前のグランフロント内のエナレッジで開催した「特別サイエンスショー&科学工作教室」は合計で約330名の皆様にお越しいただくなど、館外での成果を上げるとともに、幅広く科学館のPRにも貢献した。こういった職員・関係者の日々の地道な活動が結果に結びつつある。

経営計画で掲げた3つの平成26年度目標については、「博物館協会等との連携型事業の推進」と「大阪市内小学校による科学館活用機会の増加」の2つは達成となった。「総収入に占める自主事業等の割合の増大」については未達成となった(表3)。これは、平成24年10月に駐車場管理運営事業を廃止したことにより、駐車場収入を失ったことによる(参考:平成23年度実績63,209千円)。

表1 平成26年度入場者数

	実績	予算	対予算比	対前年比
展示場	361,479	354,893	101.9	99.9
プラネタリウム	348,339	345,107	100.9	95.3
合計	709,818	700,000	101.4	97.6

表2 平成26年度観覧料収入(千円)

	実績	予算	対予算比	対前年比
展示場	51,570	43,266	119.2	101.9
プラネタリウム	137,371	140,760	97.6	94.4
合計	188,941	184,026	102.7	96.3

表3 経営計画の目標と実績(平成26年度)

	総収入に占める自主事業等の割合の増大	連携型事業の推進	大阪市内小学校による科学館活用機会の増加
目標	59.7%	年平均20件以上	248件
実績	56.0%	27件	265件

平成26年度 事業報告書

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

I. 公益目的事業

1. 展示場事業

(1) 常設展示の公開・管理

「宇宙とエネルギー」をメインテーマに、208点の展示品を主に1～4階の常設展示場で公開した。入場者増加に伴うハンズオン展示の故障増大という科学館特有の問題と経年劣化に対応するため、日常のメンテナンスに努めるとともに、資料の追加や交換を適宜行った。また、学芸員考案の新展示を1点導入した。一方で、小学校団体の展示利用を支援するために、学習プログラムを引率者へ配布した。

(2) 企画展示

「はやぶさ帰還とイトカワの石」では、2010年に小惑星探査機「はやぶさ」が持ち帰った小惑星イトカワの石（微粒子）の実物を関西で初公開し、関連資料を合わせて展示した。その他、世界結晶年協賛の「THE 結晶展」や「はやぶさ2」、「江戸時代の天文学」の3つの企画展を実施した。

(3) 展示解説ボランティアによる展示案内

展示場にて、案内や展示品解説、実験演示等を行った。また、登録者が一斉に参加してガイドを行う「サイエンスガイドの日」や「電気記念日協賛事業によるスペシャルイベント」を実施した。登録者数：60名、活動延人数：1,446人、指導員：4名

(4) サイエンスショーの実施

学芸員を中心に1日4回を原則に1回30分の実験ショーを3ヶ月毎にテーマを変えて行った。実施回数：1,043回、見学者数：73,623人

(5) エキストラ実験ショーの実施

サイエンスショーとは異なる実験ショーをボランティアが演じた。実施回数：308回、見学者数：12,432人

2. プラネタリウム事業

1日2番組合計7回のプラネタリウム一般投影を基本に行った。この2番組のうちの一つは3ヶ月毎にテーマが変わる学芸員等による生解説で行うもの（一般投影A）、もう一つは全天周映像を組み込んだ番組である（一般投影B）。前者5番組のうちの一つ、「天の川って、なんだろう」は、天の川の正体を、生解説にあわせてダイナミックな映像で紹介し、座席占有率が約62%にヒットとなった。後者4番組のうちの一つ、「オーロラ」は全天周映像システムが映し出す美しい映像で、座席占有率が約65%のヒットとなった。学芸員が自主制作したもので、他館への配給をも目指すものである。

(1) 一般投影A

「今夜の星空」の解説に加え、学芸員等による生解説を基本スタイルとして投影を行った。投影回数：1,021回 見学者数：156,244人

(2) 一般投影B

全天周デジタル映像作品をテーマとして、学芸スタッフ等による生解説との2部構成で投影を行った。投影回数：697回 見学者数：123,027人

(3) 全天周映像

CG デジタル動画作品「HAYABUSA –BACK TO THE EARTH-帰還バージョン」を上映した。上映回数：117回 見学者数：14,730人

(4) 学習投影

学校団体専用に学校教育用に投影を行った。見学校：309校、投影回数：114回、見学者数：22,679人

(5) 幼児投影

学芸員による手動投影で、それぞれの季節に見える星空や、星座や天体の話題を紹介した。投影回数：52回、見学者数：13,610人

(6) ファミリータイム

幼児連れの家族向け投影を行った。投影回数：117回、見学者数：17,468人

(7) スペシャルナイト

天文学の普及と市民の生涯学習に資することを目的に、学芸員の専門・得意分野を活かした特別投影を実施した。実施回数：3回、見学者数：675人

3. 資料の収集及び保管、調査研究事業

(1) 資料の収集・保管

合成ダイヤモンドの寄贈を受ける等、寄贈・寄託資料 134 点、借用資料 40 点を収集した。

(2) 調査研究

(ア) 中之島科学研究所

学芸員と外部研究員 6 名が情報交換を行い、研究活動を推進した。実績は下のとおり。

- ・学術誌等での論文掲載、学会等での口頭発表合わせて 18 件
- ・第 5 回「全国理工系学芸員展示研究会」を開催し、他館の学芸員と意見交換を行った。
- ・毎月 1 回のコロキウムにおいて、研究員が市民公開の場で研究報告を行った。

(イ) 外部資金獲得

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）など

2 件 76 万円

4. 教育普及啓発事業

(1) 科学教室、講演会、教員研修など

日本物理教育学会近畿支部などとの共催による「青少年のための科学の祭典第 24 回大阪大会サイエンスフェスタ」が 2 日間で 24,000 人を集めた他、37 件（内他組織の協力等を得たもの 27 件）の各種事業を実施した。参加者は自由参加を除いて 4,867 人であった。

(2) 科学デモンストレーター研修

実験ショーの人材養成を目的に、1 年間の研修を行った。研修生：3 名 修了者：2 名

(3) 天体観望会

市民対象の天体観望会を、ボランティアの天体観望会指導員の協力のもとに実施した。

実施回数：8 回 参加者数：845 人

(4) ジュニア科学クラブ

小学校 5, 6 年生が毎月 1 回科学館に集合し、プラネタリウム見学や実験教室等での活動に取り組んだ。会員数：150 人

(5) アウトリーチ事業

モバイルプラネタリウム、出張サイエンスショー、特別講演会など合計 32 件（自由参加を除く参加者数 3,794 人）を実施した。

5. 建物・設備等に関する管理運営事業

科学館の土地、建物、設備等の維持・管理及び運営を適正に行った。

当協会の専門性の高い技術職員が、法定点検など各種設備点検を確実に行うとともに、設備故障を未然に防ぐ観点から、日々、工夫を凝らして巡回を行うなど、建物や設備の安全確保のための活動を展開した。

6. 情報発信及び広報・宣伝事業

科学館ならびに科学と科学技術の普及啓発のため、ホームページの充実等多彩な手法による情報発信を行うことで広報・宣伝に努めた。

II. 収益事業

売店事業

科学館への来館者に、当協会の学芸員が作成したミニブックをはじめ、こよみハンドブックなどの科学書籍、科学雑誌、オリジナルグッズ等の商品の販売を行った。また、科学館西側屋外テント内に、自動販売機を設置し、清涼飲料水等の販売を行った。